

新玉の、年の二歳を待佐びて、待るる顔に待つ顔を、合せ鏡の蒲団さへ、色でもてるか四手駕籠
(二より) 花が人呼ぶ浮気の花が、月に浮るる浮気な月に、浮に浮るるやれ月花に

折込ぢや

合点ぢや

かた山ぢや

合点ぢや

げこは酒手ではぎの花

飲こんだ

さまは

なる口こちや色しやうこ、紅葉も風にやつしごと、拍子とりどり来りける

罷り出たる者は吾妻の与四郎と申す駕昇にて候

罷り出たる者は難波の次郎作と申す豪い駕昇にて候

アコレアコレ、何ぼお主が難波難波と言ても、江戸のやうな紫色はあるまいが

イヤ何ぼこさんが爾言んしても江戸には又大阪のやうな揚屋はまんすまい

ア仲の町の灯籠が見せたいわい

そんなら又住吉大満高津の祭、あのやうな仁輪加はまんすまい

事も愚や御殿山に飛鳥山、上野のやうな桜があるか

ア伝法院の鶴が見せたいわい

そんなら江戸のやうな結構なお屋敷があるか

サアそれは

しやつとでも言て見ろ

や此奴はあやまつと

ちつとさうでもゐるまい、ハアア何の役にも立たぬ事を、いかい痴な、ときに棒組、あの山々の景色を見やれ

どれどれ成程なあ、よい景色だ

あれを眺めて、さらば一服致さうか

降る酒見れば雪ならで、おのが羽こぼす白鳩や、雲か煙草の薄煙輪になる梅に黄鳥も、まだ雀鳴きの擦火打、石より堅い棒組に、角のとれたる息杖は、五枚銀杏に三ツ銀杏、よい相方の戻駕籠

何と次郎作、おいらが乗て来た振袖は何であらうな

あれは島原の傾城、小車太夫の禿さ、そんなら此処へ呼び出して、島原の郭の話を聞かうぢやあるまいか

これはよからう、サアサア嬢さん爰へお出出

谷の戸開て黄鳥の、まだ里馴染め風情にて、面はゆげなるその素振、申し此処はマア何といふ所でまんすへ

此処は紫野といふ所さ、ときに姉さん、何と島原の郭の話を、話して聞かせる気はないか

サアそれは

これその代りに俺も江戸の吉原の情事を、あとで話して聞かせるは、コレ棒組お主も新町の話をする気はないか、どうだどうだ

さう言ば俺も又新町では花をやつたものよ、此駕昇に引換へて、紋日物日の控装は、腰巻羽織一つ前、よしや男の丹前姿、ゆりかけゆりかけ寛瀬出立ナ見せたいわい

さうであらうよ、逆もの事に其話が、聞きたいわいなわいな

成程話して聞かさうが、肝心の太ががない

おつとそこらは台点と、息杖取りて差出せば

これも新し風俗と、其儘とつつかみ差し

又往昔に

立帰り

振て振出す花吹雪、振出す振出す花の雪よの、腰巻羽織雲の帯

亘の町どつこい下の町

どつこい

中のなかのなかの仲の町、さまに焦れて柴船の、薫り床しき一つ前、どつと寝てとうした流石東の男山

コイヨ

コイ

おらは元来つかはれ者よ、今度此度めされた気転きかせて智恵の輸出して、やるぞ白紙ふみばこちさう衆生済度にいろがの、晩に御座らば窓から御座れ、窓は広かれ身は細かれ、忍び来る夜の其風俗は、恋の奴の通り者

サアこれからは相方の女郎がなければ話されぬ

コレ此子が禿でなくばなあ

そんなら私が禿故、その相手にはならぬかへ、ヲヲしんき

禿かむろとたくさんさうに、言ておくれな訳見習ふて、纏て悪所を島原の、ませよりそむる監の花、外で弄られ内では腰れ、ほんに身もよも敷ふる、雨の柳の出口まで、幾度通ふ小夜千鳥、鳴きやしよさいか味気なや

やんややんやどうもいへぬ、是でまあ京大坂の話は済だといふものだ、サアサアこれから江戸の吉原話を、与四郎頼むはたのむは

先おれが情事と言は、江戸町でなし二丁目でなし角町京町小店でなし河岸でなし

そして何処ぢや

恥かしながら河豚汁よ

ハアア鉄砲か

あやまるの

サア其話が聞きたいききたい

問はれて言も恥かしいが、広袖であらうが細帯であらうが、逢たといふ日にやア闇雲よ、雷神門にも柳橋にも、猪牙も四手も多けれど、奴を思へば日和駄で帯を締直して、ずつと駆出すせうがにやア

地廻り節に所紋る、つい手拭の煙冠り

月待月待だいまちや、田町に御座る法印さんの、守りお札や占やさん、よく相性も木性と火性、吸付煙草の火皿さへ、鉄砲店の気散じは、短き夜半をきりぎりす、枕も床も上草履、浮気同士の仇競べ、廻らば廻れ女気の、口説せぬ日も茶碗酒、コハ馬鹿らしぢやないかいな

ア成程きつものだ、イヤまた新町の揚屋といふは別なもののよ、太夫天神引舟鹿恋、限りの太鼓をうつまでは、それはそれは賑かな事、何と話して聞かさうか

こりや面白からう、サアサア所望ぢやしようぢや

先揚屋の数は十二軒、十二因縁を表したり、九品の浄土の九軒町、瓢箪町の名にかむ、弥陀の西口藤節の、歌三味線の音楽に、虚空に花を降らせつつ、歌舞の菩薩の揚屋入

恋の山口名も高鳥や、色の世界に住吉や、通ひ馴れたる新町の、井筒にかけし大和歌、由縁の端の兼好が、酒に底なき盃蓋も、直にはうけぬ横町の、童子と聞けば茨木や、手元みやこと捻上戸、あれ

晩方の明星が、西の扇や東にも、ちらりちらりちらりと千鳥足

生野草薄鈍情なし手なしの癖として、悪酒落いふたり大通仕打はあるまいが、どうい理屈か気が知れぬと、太夫が心をひいたれば、其処で彼奴めもむつとして

コレコレ此胸つくしを此様にとつたほうから涙ぐみ、そりやマアなんの事ぢやいな、私やお前に打込んで、身をつくしたる難波潟、梅よりすいな殿振りに、誑されて咲く室の闇、昼も屏風の冬籠り、抱て

音締の味締も、いとし男をよそへ歌

纏て東へ行身ぢやものと、袂に露を置炬燵、布団のうちの悪酒落が、この紫色の江戸自慢、捻らしやしんしが、叩かんしんしが、とても邪慥な氣に惚れた、女子心の一筋は、コレこの癪の手を取りて、引寄せ